

特集

地域発!

“未来をつくる”
教育持続可能な社会の
実現のために

村上千里さん

特定非営利活動法人
「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議
(ESD-J) 事務局長
<http://www.esd-j.org/>

「国連持続可能な開発のための教育の10年(ESDの10年)」が平成17(2005)年から始まり、1年が経ちました。世界が直面する環境と貧困の問題に同時に取り組む「持続可能な開発」のために必要な教育に取り組むこと、国際協力を積極的に推進することをめざした運動です。

「持続可能な開発」とは何をさすのか、この世界の一人である私たち一人ひとりには日常の生活の中で何をすべきなのか、また、これからの市民の学びとボランティア・市民活動のポイントについて、「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)の村上千里事務局長にお伺いしました。

ESD-J:「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議
「ESDの10年」を契機に、持続可能な社会づくりのための教育を推進するために発足した、日本のネットワーク組織

「持続可能な開発」とは何をさすのか

平成17(2005)年から、国連を中心に「持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development / ESD)の10年」という動きが世界各国で始まっている。

「持続可能な開発」とは英語の「Sustainable Development (SD)」という表現を翻訳したもの。「開発」という言葉は、日本では自然破壊をともなう経済活動に関係して用いられることが多い。そのため、「持続可能な開発」という表現には違和感を持つ人も少なくない。しかし、この「Development(開発)」は、経済開発に限らず、社会開発、技術開発、また人間開発といった使い方にもあるように、「潜んでいるもの、持っている可能性を引き出し、開いていく」という意味合いを一般的な用法としてもっている。人々のよりよい暮らしのためにどのような開発が必要なのか、開発のあり方を考え直すという意志が、この表現には込められている。

環境問題と貧困の問題を同時に解決する
必要性

1960年代以降、世界各地で公害や自然環境破壊といった問題が噴出し、同時にエネルギー危機と資源の有限性が意識され始めた。大量生産・大量消費を中心にした従来の社会のあり方では、いずれは発展に限界が訪れ、現在の地球環境を未来の世代に引き継ぐことができなくなるだろうと予測されるようになった。

その一方で、いま地球上で暮らすすべての人間が、開発の恩恵を受けて豊かな生活をしているわけではなく、南北問題に代表される富の偏在や貧困の問題は依然として深刻である。人々の基本的なニーズを満たすための開発を必要とする国はまだ数多く存在する。さらに、先進国の暮らしは発展途上地域に負担のしわ寄せをしながら成り立っている。環境問題と貧困や不正の問題を同時に解決し、よりよい“未来”をつくらなければ、現在の社会は今後「持続」することはできない。こうした状況認識が、「持続可能な開発」という概念を生んだのである。

自ら課題解決に参画する
人間を育てる「教育」

「ESDの10年」は、2002年9月のヨハネスブルグ・サミットで、日本政府とNGOによってその実施が共同提案され、この提案は国連総会で全会一致で採択された。ユネスコが主導機関となり、2005年9月に最終的な国際実施計画が決定した。これを受けて現在、多くの国で国内の実施計画を策定している段階である。

この運動の目的は、環境・人権・平和・ジェンダー・国際協

力・多文化共生・福祉などのさまざまなテーマに取り組む教育活動を「持続可能な開発のための教育」というキーワードによってつなぎ、新しい社会、よりよい“未来”をつくるために役立てることにある。そこで大切なのは、自分が気づいた社会の課題を解決するのは自分たち自身であることを認識し、自ら課題解決に参画していく人間を増やすことだと思う。自分で調べ、考えて行動し、場合に応じて他の人々と協力して課題の解決にあたることのできる人間を育てる。そのためには、一方向的な知識伝達型ではない、新たな教育のあり方も必要となるはずである。

具体的なイメージで諸課題を結びつける

ひとつの課題について取り組みを深めていくと、別の課題とつながっている。現代社会ではそういう例が少なくない。そこで新鮮な視点を得たり、その課題に取り組む人たちとの出会いがあれば、自分の活動をさらに新しく展開させていくことが期待できる。

ESDはそれぞれの地域課題を通して考えられるべきものである一方、世界の課題にも開かれている。具体的な教育プログラムを組み立てるにあたっては、身近な事象から視野を広げていくことを意識してほしい。例えば、食卓に載る食材は今や世界各地から集まり、それぞれの地に暮らす人々とも無縁ではない。「お豆腐の大豆はどこからきたか?」「どうやって作られ、ここまで運ばれてきたか?」「どうして国産ではないのか?」「作った人たちはどんな生活を営んでいるのか?」といった関心から、世界のさまざまな問題を知る手がかりを得ることができる。遠く離れているように思える課題を、できるだけ具体的なイメージで結びつけ、目に見える成果を着実に示すことが大

ESDのエッセンス・概念図



切だと思う。

また現代では、ある問題を解決する努力が、他の問題の原因となるケースもある。例えば、車社会の弊害をなくすために自転車の利用を呼びかけると、違法駐輪が増えたり、歩行者が危ない思いをする、という問題が出てくる。そうした複合的な問題の解決には社会のあり方自体を見直す必要があることに気づけば、さらに視野を広げることもできる。

学校と地域、関係者をつなげる役割

ESD-Jの活動が始まって3年目。10年をかけて、多様な社会問題の解決のための教育づくりの実現をめざしていく。そのために現在、①政策提言②情報共有③地域ネットワーク構築④国際ネットワーク構築の四つの活動に取り組んでいる。

具体的な例では、学校が進められている「総合的な学習の時間」について、ESDと重ね合わせて取り組むことが期待される。しかし、ESDはもちろん学校教育に限るものではない。社会教育・生涯学習の方向から、今の時代に責任をもつ大人が改めて学びなおす内容がESDにはある。大人自身が学びながらよりよい社会をつくる努力を自ら身をもって示せば、それこそが次の世代に対する効果的なESDとなるだろう。

地域にはすでに、さまざまな活動を進めている方たちがいる。しかし、教育の現場、特に学校とそうした人たちのつながりはまだまだ希薄。また前述のように、課題解決に向けて異なる分野の活動者をつなげる必要性も高い。関係者をうまく結びつけ、コーディネートする「しくみ」を、制度面からも築いていく必要がある。ボランティアコーディネーターとして活動している方々は、地域の活動者の状況をよく知っており、こうした面での役割を大いに期待したい。

「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」のキックオフブック
「ESDがわかる!」(B5判、24頁、無料)
が完成しました。

ESD、ESDの10年、ESD-Jをわかりやすく紹介しています(配布申込みを受付中/HPからのダウンロードも可)。詳しくはESD-J事務局までメール、FAXでご連絡ください。

「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)
〒160-0022
東京都新宿区新宿5-10-15
ツインズ新宿ビル4F
(社)日本環境教育フォーラム内
TEL:03-3350-8580
FAX:03-3350-7818
E-Mail: admin@esd-j.org

ESD的! な学びの実践ポイント

実践事例からみる そのポイント

「……でも、どんなものが“ESD的”なのか、もうひとつよくわからない……」
というあなたのために、各地で取り組まれている事例の中から、
“ここがESD的!”というポイントをご紹介します。

活動例1 地域にあふれる放置自転車。その対策として、生活用材である自転車と武器を交換することにより、アフリカの紛争地での武装解除と武器回収につなげた。この活動を通して、身近な地域の交通状況、大量消費・廃棄の問題の構造を理解し、さらに国際的な問題への関心を育てている。

Point! 身近な生活課題を通して世界の問題を考える／子どもも大人も学び合える

活動例2 子どもたちの居場所と「もう一つの」学びの場としてフリースペースを父母が共同で運営する。さらに、ここに集う不登校児が中心となってパン屋を立ち上げ、その自立と社会参加を支援。同時に、生産・加工・販売を通して都市と農村の交流を進めている。

Point! 学校外に教育の場を実現する／学習を社会参画に結びつけ、さらに社会構造を学ぶ／子どもも大人も学び合える

活動例3 過疎高齢化が進むまちで、高校生がカライモ生産にあたり、地域社会の活性化をめざすと同時に、新たな収益源をつくり出す。その収益を利用して「寺子屋」を立ち上げ、地域住民がみんな子育てに取り組む。

Point! 地域社会を大人と子どもがともに作りあげる

活動例4 学校の空き教室を地域に開放し、住民が管理にあたる。ここを住民同士が「たまり場」として利用し、新しい地域コミュニティを形成する。ここを舞台にしてサークル活動も活発化し、地域の人々と子どもたちの交流の場が出現。授業では教えられないことを地域の多様な大人たちから学ぶ。

Point! 学校と地域を結びつける／子どもも大人も学び合える

活動例5 学校の「総合的な学習の時間」に地域のボランティアが参画、そのコーディネーションを教育委員会の委託で地域V団体が行う。障害者が子どもに地域の課題を伝え、直に交流する。この体験から、障害者と子どもたちの双方が社会参加していくきっかけを生み出す。

Point! 子どもと地域の大人を出会わせる／子どもも大人も学び合える／地域の課題発見・解決に主体的に取り組むことのできる人づくり

活動例6 NPOが企業の環境活動と子どもの環境学習をつなぐ。エコ文具の推進、お店体験などを通じて子どもが学ぶ。企業・学校・NPOがパートナーシップで環境学習プログラムを開発・実践。子どもたちに教えることで大人自身が学ぶ機会をつくる。

Point! 多様な活動主体を結び、活動を広げる／子どもも大人も学び合える／大人は自分の仕事のあり方を新たな視点で見直すことができる

※参考:「ESD-J2004活動報告書「国連持続可能な開発のための教育の10年」キックオフ!」

“未来をつくる教育” 三つのポイント(コア(核))

1
多面的なものごとの見方や
コミュニケーション能力などの
〈育みたい力〉

2
参加型学習や
合意形成などの
〈教育・学習手法〉

3
共生や
人間の尊厳などの
〈価値観〉

ESDの
エッセンスを知る
ための
ワークシート

どのような力を育むことを
目指しているか?

- 自分で感じ、考える力
- 問題の本質を見抜く力／批判的思考力
- 気持ちや考えを表現する力
- 多様な価値観をみとめ、尊重する力
- 他者と協力してものごとを進める力
- やり方から作り直す力
- 自分が望む社会を思い描く力
- 地域や国、地球の環境容量を理解する力
- 自ら実践する力

など

どのような教え方・学び方を
重視しているか?

- 参加体験型の手法が活かされている
- 現実的課題に実践的に取り組める
- 継続性がある
- 多様な立場・世代の人々とともに学べる
- 学習者の主体性を尊重する
- 人や地域の可能性を最大に活かしている
- 関わる人が互いに学び合える
- ただ一つの正解をあらかじめ用意しない

など

どのような価値観をつちかう
教育か?

- 人間の尊厳はかけがえない
- 私たちには社会的・経済的に公正な社会をつくる責任がある
- 現世代は将来世代に対する責任を持っている
- 人は自然の一部である
- 文化的な多様性を尊重する

など

小冊子「ESDがわかる!」より/2006年1月現在。活動のチェックリストに、あるいはミーティングやワークショップの素材としてご活用下さい。